「第二次世界大戦期における日本と英米の新聞についての比較文体研究」

岩　本　典　子

従来より、第二次大戦期における新聞に見られる戦況報告の言語・文体を様々な角度からの比較研究という形で調査している。理論的枠組みとして「状況と文体」の関係を説く Michael Halliday の機能主義文法と Ronald Carter らの唱えるテクスト分析の手法を採用している。

現在は、日本の新聞と英米の新聞との共時的な比較研究を試みている。よく知られていることであるが、戦時中の日本の新聞は、挙国一致的国家体制のため、厳しい情報統制下にあり、事実を正確に報道せず、時に大きく歪曲して、報道することが求められていた。たとえば、戦争後期においては、自国軍の敗退をも、あたかも勝利であるかのような、能動性を帯びたレトリックに基づく報道がなされていた。また、最高の賛美や強いニュアンスを表す語彙も多用されていた。たとえば、「皇軍精鋭部隊堂々入城」「〇〇島に皇軍の神髄を発揮」のように。要するに、華美な修飾語句で装飾し、実際に何が起こったかということの本質は、曇らせているようである。

この時期の新聞記事をひとつのテクストとしてとらえた場合、ジャンルとしては、事実を客観的に報道する単なるニュース記事というよりは、むしろ literary device（文芸的趣向）の濃い、narrative（物語体）に近いものであるといえよう。

それと比較し、当時の英米の新聞はどうであったのか。たとえば、日本軍が優勢であった戦争前期におけるマニラやシンガポールでのイギリス軍の対日本軍への敗退や、バターン半島における米軍の敗退はどう描写されていたのであろうか？データによると、自国軍の敗退は敗退とされ、それに至る被害状況の描写も綿密で、descriptive（記述的）であることがわかってきた。日本の新聞に見られたような顕著な文芸的技巧も少ない。テクストのジャンルとしてとらえた場合、日本の当時の新聞が、narrative 的であったのに対して、英米のものは、prosaic（散文体）であると特徴づけられる。“prosaic” という単語を辞書で引くと、「殺風景な、おもしろくない、活気のない、単調な、平凡な、退屈な、詩的美しさのない」という訳語が列挙されているが、まさにそのように、淡々としたスタイルの描写であったことが特徴づけられる。

このことは、当時の日本における新聞のプロパガンダ的特性が、他に比して如何に高かったかということの裏付けにもなるであろう。しかし、そのことは、この戦争期に、検閲や統制を受けていた新聞にのみ限定的に該当することを念のため強調したい。たとえば同時期においても、検閲や統制の範疇（ちゅう）外にあったテクストや、異なった時代のテクストは、また別の文体的特徴を醸し出すのである。